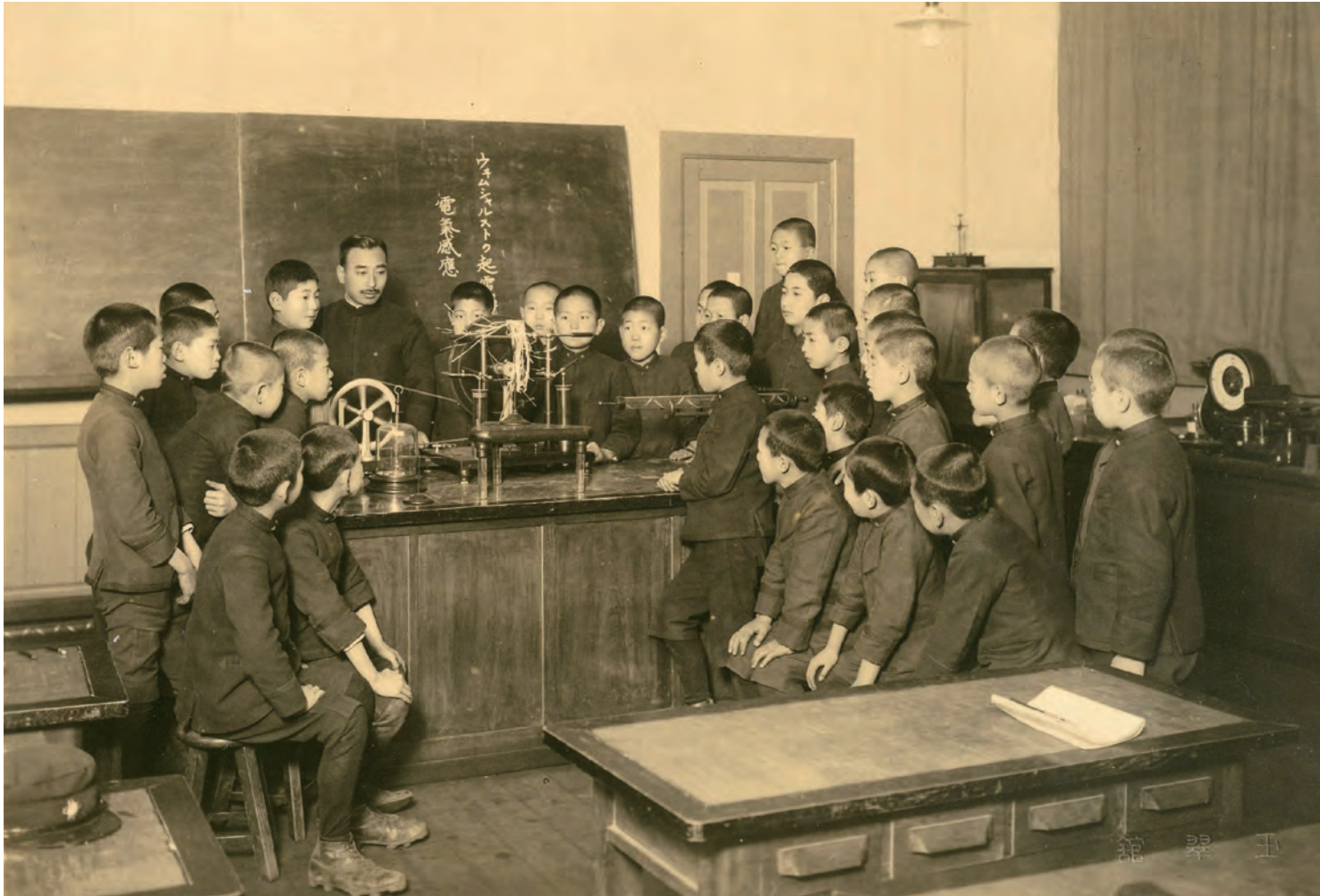


学習院アーカイブズ ニューズレター

07

Gakushuin Archives Newsletter 2016.2.20 vol.



大正15(1926)年3月 初等科卒業写真帖より「理科教室」

この卒業写真帖には、「理科教室」「綴方教室」といった授業風景の写真も収められている。生徒達の表情からは、撮影時の緊張感と共に、わくわくした気持ちを読み取ることができる。

Contents

図書館にある学習院関係資料

学習院大学図書館 次長 中村 丈夫 …………… 2

「学長っ、アーカイブズって結構使えますよ」

～東京外国語大学文書館の「広報」活動を中心に～

東京外国語大学文書館 倉方 慶明 …………… 5

史料紹介 一山梨院長と学生一

桑尾光太郎 …………… 7

主な活動 (2015年7月～2016年1月)

…………… 8

図書館にある学習院関係資料

学習院大学図書館 次長 中村 丈夫

学習院大学図書館には一般学術書の他に貴重な多くの資料が所蔵されている。この貴重資料の多くは明治以前のもので虫食いや傷みもあり保存・管理が難しく、貴重書庫で保管されている。貴重書庫の書架はスチール製だが全ての棚には桐の板が設置され、壁と天井は、湿度調整ボードで覆われている。照明は紫外線カットの蛍光灯を使用し、室内は空調に加え24時間稼働の除湿機器を設置しており、室温摂氏25度、湿度50～60%を維持している。だが、資料にとって大敵である虫菌類を除去する燻蒸は行っていない。また万が一の火災の際には酸素を遮断するハロゲンガス噴射装置も設置されていないため、炎や放水、消化剤から資料を守ることが出来ないのが現在の問題となっている。資料の中には酸性劣化が進んだものもあり、気が付いた時に脱酸処理を行っているものの、まだごく僅かしか処理ができていないため中性紙封筒や中性紙箱で保管し現状維持に努めている。

貴重書庫内の資料は知の遺産、文化遺産として後世に引き継いでいく義務があるため、原本資料の保存上、少しずつではあるがデジタル化を進めている。後述する京都学習院旧蔵資料はデジタル化を完了し、華族会館寄贈資料はデジタル化を進めているところである。デジタル化した資料は、Web上で閲覧に供することで原本の劣化を防いでいる。これら貴重資料群の中でも学習院に関係する資料を幾つか紹介する。

雑誌『白樺』

武者小路実篤、志賀直哉など、後に白樺派と呼ばれる作家が、同人誌として明治43(1910)年に創刊したものである。有島武郎、木下利玄、里見弴、柳宗悦など白樺派の多くは学習院出身者である。だが当時の図書館では『白樺』を所蔵していなかった。

昭和になって『白樺』は、亀田氏から贈られた「亀田基金」で購入された(昭和14(1939)年6月)。創刊から約30年の時を経て、学習院図書館に所蔵され

ることとなり、現在は貴重書庫に保管されている。学習院図書館は、当時この基金を元に『うつほ物語』(写本)ほか漢籍、和書・洋書などの貴重な資料を購入している*¹。



配架された『白樺』

文芸誌『学習院文藝』～『赤繪』

新制学習院大学が昭和24(1949)年に開学した翌年、吉村昭が大学に入学した。吉村は、昭和21(1946)年に旧制学習院高等科に合格したが放棄し、翌22年再び受験し入学している。翌年まで在学したが、胸を患い通学ができなくなり、その後、改めて新制大学に入学した*²。

吉村は文芸部に所属し、当時文芸部が発行した『学習院文藝』創刊号(昭和25年6月)からその名が刻まれている。『学習院文藝』は7号まで発刊された後、8号(昭和27年[4]月)でタイトルを『赤繪』と改め、昭和59(1984)年の35号まで発行された。『学習院文藝』及び『赤繪』には、後に吉村の妻となる北原節子(作家・津村節子、当時は短期大学部に在学)も参加しており、その名を見ることができる。

『赤繪』は、23号で一旦途絶えたが、その後3年を経て昭和40(1965)年に復刊されている。この復刊24号には、吉村昭、津村節子両氏が寄稿している。

24号の発刊当時は、津村がちょうど『玩具』で第53回芥川賞を受賞した年である。その翌年には吉村が『星への旅』で第2回太宰治賞を受賞している。二人が名実ともに作家としての地位を築いた頃である。

『赤繪』という同じ誌名の同人誌は、吉村の先輩にあたる三島由紀夫（平岡公威）も昭和17（1942）年に創刊していた*³。誌名を決めた後にそれを知った吉村は、三島に『赤繪』という誌名を使うことをお願いに行き諒解を得たと回想している。吉村の誌名は国立博物館で最も好きだった「萬曆赤繪」からとったとある。三島の『赤繪』は所蔵していないが、白樺派の志賀直哉が書いた『萬曆赤繪』（中央公論社 昭和11（1936）年刊）*⁴からとった誌名であるという。吉村も同様に連想していたとあり大変興味深い。当時の三島は、吉村にして“作家的地位を確実に築いてしまっていた”と言わしめるほどであった。そんな三島が同じ誌名の『赤繪』という同人誌をつくる後輩達のため、『赤繪』8号に詩「石切場」を託した気持ちは、恐らくは、復刊した『赤繪』24号に寄稿を求められた吉村、津村両氏のそれと同じであっただろうと想像する。



『学習院文藝』『赤繪』

『学習院新聞』『学習院大学新聞』

新制大学が開設されて間もなく『学習院新聞』が昭和24（1949）年6月27日に発刊されている。第18代安倍能成院長兼大学長が創刊号に「学習院新聞に寄す」と題して、「この新聞は学習院の思想を指導するとか統一するとかいう不可能事は思い切り、〈略〉学習院全体の公的な機関として、教育学問の府としての学習院の飾りない報知によつて学習院のゆがめられぬ真実を伝えるやうにしてもらいたい」と大きな期待を寄せている*⁵。また編集員らには、「何よりも記事の真実を尊重してもらいたい、さうして真実の報知

が好い加減な論文よりは価値の多いものだということを得てもらいたい、さうして学内の消息、〈略〉院内の新企画、諸教授の研究、講演会、研究会の〔通知、運動会、競技、輔仁會各部の活動その他、できるだけもらす所なく精確に伝えてもらいたい〕とこの新聞の編集方針を望んでいる。創刊号の1面は、新制大学開設の記事をはじめ、女子部の夏期予定、高等科生の米国留学、人事など、学習院を網羅した記事がみられる。この『学習院新聞』は、約20年を経過した昭和47（1972）年に200号をもって『学習院大学新聞』と紙名を変え、現在も「学習院大学新聞社」から発行されている。



『学習院新聞』創刊号1面

当館では紙名を『学習院大学新聞』とするものを他に2紙所蔵している。「学習院大学新聞会」が昭和28（1953）年2月から76号まで発行したもの、そして、「学習院大学新聞会設立準備委員会」が昭和42（1967）年から約2年間発行したものの2紙である（学習院アーカイブズによりデジタル化実施）。当時の記事をながめると、これらの複数の新聞は、それぞれ趣意が異なっていることがうかがわれる。学習院（大学）の歴史あるいは学習院大学生の動向、思考など

を知る上で、これら複数の新聞を読み比べて見るのは面白いかもしれない。

京都学習院旧蔵資料、華族会館寄贈資料

弘化4(1847)年に京都御所日ノ御門前に公家の教育機関として「学習所」が開講された。その後、明治10(1877)年に華族会館が東京で開設した学習院には、京都学習院時代の旧蔵書が多く引き継がれている。現在、大学図書館には、約1,500冊余りの資料が所蔵されているが、その多くは漢籍である。大学図書館では、平成24(2012)年度にこれらの資料をすべてデジタル化し、学習院大学デジタルライブラリーでWeb公開している。

大学図書館では、「現物資料の保存」と「デジタル公開による研究者の利便性向上」を意図して、所蔵する貴重な資料をインターネットを介して公開している。なかでも伊能忠敬の『大日本沿海輿地全図(通称伊能図)中図8枚』は、画面上で閲覧が可能で、拡大すれば肉眼よりも鮮明に詳細が閲覧できる。また明治に学習院が開業した際に華族会館から寄贈された同会館の収集した資料(洋書約900冊、和漢書約6,500冊)についても、財団法人霞会館のご支援をいただき、平成26(2014)年度よりデジタル化を進めているところである。



華族会館寄贈資料

さいごに 一学習院図書館一

図書館には紙媒体の貴重な資料の他に数々の物品類がある。それは図書館創建から連綿と保存してきたもので史料的にも貴重なものである。旧制中等科・高等科の教室で使用された二人掛け椅子は、椅子の背中部分が後ろの生徒の机になっていて興味深い。また第10代乃木希典院長が寄宿舎で学生と生活され

ていた頃の品々も、平成6(1994)年まで館内の通称「乃木室」といわれる部屋に多数あった。それらのうち多くは、いまでは学習院アーカイブズに移管されている。また昭和初期に設置された歴史地理標本室の物品類も、戦後は一時図書館に収納されていたと聞いている。旧制高等科の蔵書の一部も1980年代頃まで図書館に残っていたと記憶している。他には軸装もの、書画、屏風、ガラス乾板等の他、明治時代からの事務書類も保管されていた。「学習院」の勅額も現在は学習院大学史料館(管理者は総務部)が保管しているが、平成9(1997)年まで図書館が大切に保管していた。

新制大学初代図書館長をつとめた末松保和教授は、「大学図書館として完成されることのみが理想ではない、一貫教育の学園学府の、即ち学習院全体の図書館として完成されねばならぬ」と、大学となってもその精神に変わりないことを『学習院新聞』創刊号で述べている*6。昭和38(1963)年9月竣工の二代目の現図書館の入口上部には大学図書館ではなく「図書館」とのみ明記されており、当時もなお「学習院図書館」であったことが想像できる。このように、明治10(1877)年の学習院創設以来、大学となっても図書館は「学習院全体の図書館」として存在していた。

図書館は学習院のいわば「文庫」「倉」「蔵」としての機能を備えていた。時には保管に苦慮した文書・物品も含め、保存・保管の必要があれば図書館に収納しておくのが常だったようだ。つまり、学習院図書館は書物も書類も物品類も学習院全てをアーカイブしていたのである。

- *1 「亀田基金と戦時下図書館の輝き」学習院大学図書館資料紹介展第195回 学習院大学図書館 2006年8月
亀田基金：昭和14(1939)年に高等科3年で亡くなった亀田弘之氏の遺族からの寄付金。
- *2 『私の文学漂流』吉村昭著 新潮社 1992年
「『赤繪』について」吉村昭著『赤繪』24号 1965年
※吉村の学習院入学については、別の記述もある。
- *3 『三島由紀夫事典』松本徹 佐藤秀明 井上隆史編 勉誠出版 2000年
- *4 初出 中央公論 昭和8年9月掲載
- *5 「学習院新聞に寄す」安倍能成 『学習院新聞』1号 1949年 6月27日 学習院新聞社刊
- *6 「新図書館長の抱負」末松保和 『学習院新聞』1号

(協力：情報サービス課貴重書担当 佐藤飛鳥)

「学長っ、アーカイブズって結構使えますよ」

～東京外国語大学文書館の「広報」活動を中心に～

東京外国語大学文書館 倉方 慶明



はじめに ～アーカイブズの「広報」機能を考える～

冒頭から少々下世話な話ですが、新聞やテレビの広告掲載の料金がいくらかご存じですか。

いわゆる全国紙の朝刊の広告料金について各社のホームページを参照しますと、1cm×1段の小指ほどのスペースの料金が、Y新聞で163,000円、A新聞で156,000円、M新聞で108,000円、S新聞で55,000円、N新聞で45,700円となっています。また、テレビ業界では、15秒×1本のお値段が、Nテレビで400,000～750,000円、テレビTで200,000～300,000円、Yテレビで150,000～250,000円となっているそうです(CM制作費は含みません)。ですので、「15×10cmの写真と原稿500字分」とか、或いは「19時台の時間帯に10分」とか考えますと、果たしてそのお値段は…。深く考えるのはやめておきましょう。

さて、多くのアーカイブズ機関の活動にはレファレンス対応が含まれ、その所蔵する歴史資料等に関してメディアから取材を受けることも多々あるかと思えます。そうした取材の結果、資料や親組織が新聞・テレビ放送等で大々的に紹介されることも少なくないでしょう。時には紙面いっぱい写真と原稿が挙げられ、時には19時台のニュースで10分に渡り紹介されることもあるでしょう。それも無料で！

当然、そうした取材は担当の記者や番組の問題関心に沿って作成されますし、前述の広告とは質を異にするものですが、アーカイブズにはその所蔵資料と活動によって親組織の活動に資するという立派な「広報」機能が備わっているといえるのではないのでしょうか。

もちろん「広報」機能と一口に言っても、その目的・対象・方法によって様々な種類が存在し、時には目的が所蔵資料紹介と親組織の歴史紹介にまたがるなど、一概に論じることは難しいかも知れません(図1参照)。ですが、なかなか理解されづらいアーカイブズの存在意義を主張する上で重要な機能の一つであるでしょう。

東京外国語大学文書館(以下、本学文書館)の場合、このアーカイブズの「広報」機能をどのように活かすかという問いが、設置後の活動の方向性を決める要因の一つとなりました。以下、本学文書館の設立経緯と「広報」活動を簡単に紹介しながら、アーカイブズの「広報」機能とその可能性について考えたいと思います。

図1 アーカイブズの広報活動の多様性—東京外国語大学の事例—

目的	親組織(関係者・関係団体)の紹介、文書館の紹介、所蔵資料紹介
対象	本学関係者(卒業生、在校生、教職員)、学外者(受験生・保護者、大学関係者、アーカイブズ関係者、その他一般人)
方法	展示活動、教育活動(大学史等授業)、ニュースレター(刊行物)、ポスター、メールマガジン、ウェブページ、Facebook、取材対応

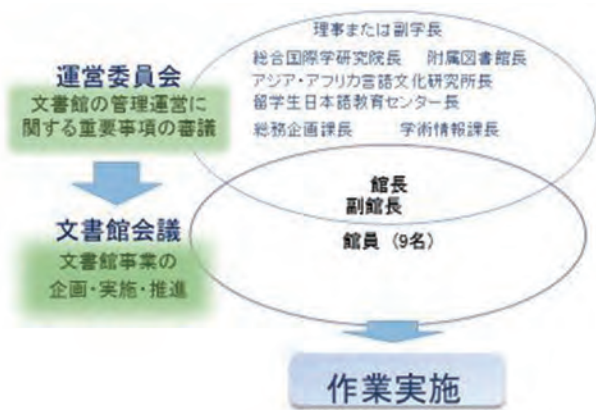
1. 東京外国語大学文書館の発足経緯と「広報」の必要性

本学文書館は1997年から1999年にかけて、百周年記念事業の一環として実施された東京外国語大学史編纂事業の際に収集された資料群を基盤に、2012年4月に発足しました。年史編纂を発足の契機とする大学アーカイブズは多いですが、本学もその類です。但し、キャンパス移転に重なったこと等もあり年史編纂から10数年の時を経てからの発足となりました。この間、特に国立大学では情報公開法の施行、法人化、そして2011年には公文書管理法が施行されたこともあり、「国立公文書館等」の指定を含め、同法に対応した法人文書管理が叫ばれていました。本学文書館はそうした動向を受け、年史編纂資料の活用だけでなく、現用段階を含めた法人文書管理体制の整備も視野に活動を開始しました。

現在の体制は、図2の通り各部局等の長を交え大学全体の文書管理体制を検討する文書館運営委員会を筆頭に、その下位に文書館会議(館長・副館長・館員の計11名)を設け、文書館の活動を討議し、その実務に研究員・教務補佐員各1名が当たっています。

稀に見る小規模所帯ではありますが2015年度には「国立公文書館等」の指定を目指し、法人文書管理体制の整備にも力を入れています。

図2 東京外国語大学文書館の体制



しかし、発足当初、出だし好調とは行きませんでした。むしろ、「文書館？そんな機関あるの？何するの？」と文書館の存在自体知られていない状況が少々長く続きました。その為、本学文書館では、文書館の存在意義とその活動への理解を広げ、大学における文書館の「居場所」を見つけるために、アーカイブズの「広報」機能のアピールに注力した活動が展開されています。

2. 東京外国語大学文書館の「広報」機能

では大学文書館にできる「広報」機能とは何でしょうか。分かり易い一つの解が、所蔵資料群を用いて大学の歴史などを学内外に紹介することではないでしょうか。

本学文書館では、発足前の準備室段階から企画展を開催し、発足後も企画展を年4回ほど開催するとともに、常設展示場の開設（附属図書館1階ギャラリー、2013年3月）、歴史紹介DVD「東京外国語大学の歩み」の制作・デジタル展示コーナー「Digital Archives」の設置（2013年11月）、世界教養科目「近代日本の東京外国語大学」開講（2014年10月～）と、既存の所蔵資料群を用い本学の歴史紹介を行う展示・教育に重点を置いた活動を進めてきました（図3参照）。これらの活動は、結果として展示場が卒業生や学外の受験生など来校者が訪問する学内スポットになった他、ホームカミングデイに合わせた企画展・講演会の開催につながるなど、文書館が歴史紹介を担う機関としてのイメージを定着させることに大きく寄与しました。

しかし、これらの活動はキャンパス訪問者や大学

関係者に対して向けられた活動であり、少々内向きのきらいがあるとも言えます。その為、本学文書館では、2014年度からは更なる広報力の強化を目指し、ウェブ上での活動の充実と新規資料群の収集・記録化プロジェクトを開始しました。

前者は大学文書館ウェブページ (<http://www.tufs.ac.jp/common/archives/>) や Facebook 上で企画展と同様の歴史紹介や活動紹介を行うもので、外国語大学の特性上、本学卒業生には海外勤務者も多い為、キャンパスを来訪せずとも世界中どこでも楽しめる展示空間を創出することを第一義的目標としています。同時にデジタル時代の今日、ウェブ空間への積極的情報発信は、本学の歴史や所蔵資料群を、学内外のより多くの方の目に触れる機会を増やすことに直結していると言えるのではないのでしょうか。ウェブ企画をそうした世間の関心の呼び水とすることも意図しています。

後者は「東京オリンピック」、「戦後70年」など一つのテーマを軸に、卒業生への聞き取りを含む新規資料群の収集・記録化を進める「参加型」プロジェクトで、聞き取り調査・資料収集等への協力も含め多数の卒業生・他機関との新たな関係構築につながっています。そうした個別の接点の創出が、今まで大学へ関心が薄かった方々に本学の状況・活動を知るきっかけとなり、かつ新たな活動によって生まれる新しい発見は、既存の資料群を活かした活動以上にメディア等で取り上げられる可能性も高いのではないかと考えています。

実際、これらの活動を通じて、メディアの取材やウェブ上に紹介した画像貸借の依頼、卒業生・関係者からの各種問合せは年々増加しており、途上段階の現在でも外向きの発信力が徐々に強化されている感触があります。



図3 展示場

結びにかえて

以上、本学文書館の活動概観ではありますが、敢えておこがましく言えば、アーカイブズが歴史紹介を通じて大学への関心を高める契機を生み出し、大学の「広報」に立派に貢献しているといえるでしょう。そして、こうした広報に力点を置いた活動は、学習院大学を含む、私立大学のアーカイブズが大いに先行している分

野です。学習院アーカイブズの『ニューズレター』を拝見しますに、そうしたメディアへの取材協力が多数報告されています。これらは貴重な資料群を適切に保存してきたからこその実績かと思えます。

そう、なので声を大にして言いましょ。「学長っ、アーカイブズって結構使えますよ（笑）」

史料紹介 —山梨院長と学生—

桑尾 光太郎

2016（平成28）年は、第17代院長山梨勝之進の50回忌・第18代院長安倍能成の没後50年にあたります。戦後学習院の再生と発展とを担った両院長の功績を再確認するため、学習院は展示や図録の刊行などの記念行事を企画しており、学習院アーカイブズも史資料の調査および準備作業にあたっています。まずは学習院アーカイブズが所蔵する両院長に関する文書や写真の調査をすすめておりますが、その一例として、「昭和寮日誌」を紹介いたします。

学習院昭和寮は、旧制高等科の寄宿舎として1928（昭和3）年に開寮し、戦時下での食糧事情の悪化のため1944（昭和19）年3月に閉鎖されました。下落合にある南欧風の瀟洒な寮舎は1952（昭和27）年に売却されましたが、現在も日立目白クラブとして健在です。寮生により綴られた「昭和寮日誌」は、1939（昭和14）年4月から1943（昭和18）年7月までの分が保存されています。山梨院長は1939年10月の院長就任以来しばしば寮を訪れて、訓示を行うほか学生と共に食事や懇談を重ねています。山梨院長が二度目に寮を訪れた1939年10月27日には、以下のよう

防空演習第四日

午後七時半山梨院長閣下併に栄木事務官来寮され燈火管制下の寮を視察され、第一寮より第四寮まで

順次寮生の生活を親しく御覧になる。各自の部屋にて勉強中のものもあれど偶々談話室にて間食談笑中のものもあり、殊に第三寮に於てはカラーの風景画を前に画伯の生ひ立ちと絵画芸術論を述べられ学生は大なる感銘を受けた。

本館屋上よりは暗夜の町を見渡され、この建物の位置と貴族子弟の覚悟を促すべきこと及びこの建物のよき利用による存立使命の發揮等を舎監へ話され深甚なる印象を残されて八時半帰られたり。



誌面からは院長と学生たちとの親しげな会話の様子が浮かんできます。こうした日常の学校生活を示す魅力的な史料を、今回の調査を機に紹介していきたいと考えております。

（学習院アーカイブズ職員）

主な活動 (2015年7月～2016年1月)

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②西5号館地下倉庫の文書ファイル等の仮目録および評価選別案作成の継続（平成14年度以前の文書ファイルを対象として）
- ③保存期間満了となった廃棄希望文書ファイルの評価選別（9部署）
- ④文書ファイル管理状況に関するヒアリング（8部署、7～12月）

◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①初等科地下倉庫所蔵文書の調査・選別（6月～）
- ②初等科勅額の調査と修復の検討（7～9月）



初等科勅額の調査風景

- ③女子部史料室・図書館所蔵資料の整理
- ④山梨勝之進・安倍能成関係資料の調査（8月～）

◆史資料のデジタル化・修復

- ①宮内庁宮内公文書館所蔵、学習院関係公文書の調査・デジタル化
- ②愛媛県生涯学習センター所蔵、安倍能成資料の調査・撮影（9月）
- ③皇族関係資料マイクロフィルム（過去に宮内庁撮影）のデジタル化
- ④幼稚園写真フィルムのデジタル化（幼稚園事業：3年計画の3年目）
- ⑤女子大学所蔵短大史写真資料の整理・デジタル化
- ⑥自動演奏ピアノの修理・調律（8月）
- ⑦受贈資料・乃木希典院長扁額の修復（11月）
- ⑧大学東洋文化研究所所蔵末松保和資料のうち、学習院史写真の調査・デジタル化（11～12月）

- ⑨百周年記念会館1階「安倍能成先生」像・扁額、佐藤忠良作「夏のこども」像の撮影（12月）

◆史資料の受贈・購入

- ①学習院給食部献立表（大正4～6年）（10月）
- ②昭和27年大学卒業アルバム・記念品等（10月）
- ③オリンピック地図・TOKYO1964（複製）（11月）
- ④学習院通用門（西門）表札（11月）
- ⑤里見弴・安倍能成ほか対談音声録音テープ（12月）
- ⑥元初等科教諭所蔵資料（12月）



元初等科教諭所蔵資料 学級新聞（昭和35年）

◆講演会・教育支援・広報支援等

- ①国立公文書館主催「アーカイブズ研修」への協力（9月）
- ②慶應義塾大学メディアセンター研修会「大学アーカイブズと図書館」にて、「学習院アーカイブズの活動と課題」報告（11月）

◆その他

- ①全国大学史資料協議会への参加、東北大学・東北学院大学（10月）ほか ※全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」（7/3～8/2）への協力
- ②ベトナム・ハノイ大学、韓国・慶北大学施設見学対応（11月・12月）

学習院アーカイブズ・ニュースレター第7号
2016（平成28）年2月20日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-3986-0221（内線2531、2551）
事務室 西5号館（本部棟）地下1階
<http://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>